みんなは、始めてしかけがわかって、すっかり感心しました。

要旨

初等科國語三の「千早城」に先行して、楠正成の少年時代に取材し、多聞丸の傳說を通して、特に兒童の合理創造の精神に培ひ、工夫創造につとめる意氣を旺ならしめようとする所に狙ひがあります。

取扱の中心

本課を取扱ふに當つて、教材のどこに重點を置いたらよいでせうか。教師用書に據れば、本教材に於いて指導すべき主要事項は、

一、楠木正成の名前と簡單な人となり。

○二、多聞丸と呼ばれた小さい時から、工夫することが好きであつたこと。

○三、精巧な鵄を作つて友だちを驚かしたこと。

四、なにごとにもよく工夫すること。

○五、常によく觀察し、よく考へる態度を持すること。

六、ものごとをするには計畫を立て順序よくすること。

七、考案、製作に際しては、みだりに材料を買つたり、贅澤なものを使用したりしないこと。

八、役に立つ新しいものを工夫すること。

以上でありますが、多聞丸の傳說を語ることによつて指導される子どもたちに、自分もまた工夫してものを作り出したいといふ意欲を喚び起させることが目的であります。學級の事業、兒童の素質の如何などによつて、實際の指導に對する重點を色々に考へて、適切な施設と相俟つて○印のついてゐることに重點を置くのがよいと思ひます。

取扱上の注意

一、楠木正成については、その人となりを兒童は知りません。教材の取扱の最初に於て簡單な解說をしておかなければなりません。

二、本教材はヨイコドモ下の「カミノ舟」の發展であり、本書六の「種痘」とも相通ずるものであります。この種の教材がこのやうに反復されますのは、今日我が國の文化に於て特に合理創造といふ點が足らないからであります。しかしこれは、我が國民の素質がこの方面に於ては他國民に比して劣つてゐるのではないことは、大東亞戰爭に於ける科學兵器の種々なる發明を見てもわかるのです。

取扱の實際に當つては國民の素質が非常に優秀で、發明・工夫力に富んでゐることに說話の要點を置くべきです。決して合理創造の點に足らない所があると云つてはなりません。

三、本教材の目的としてゐる考察、處理は、特に藝能科工作の指導と緊密なつながりがあります。工作の指導に際しては常に本科の狙ひとした所に結ばねばなりません。幸ひ此の期の子ども達は工作について興味を持つてゐます。その上に事實を詮索し探究する理智的態度が大分顯著になつてをり、工夫し製作する技術的な興味が昂進してをります。この兒童心理に應じた工作を課せねばなりません。

四、工作は完成された製作物をもつてその目的とせず、工作をしてゐる經過が指導の對照とならなければなりません。即ち結果主義でなしに經過主義でなければなりません。經過主義とは結果に至るまでの道中が指導上大切であるとの意味であります。

時間配當

二時間乃至三時間。

準備

掛圖（後期用第七・八圖）

楠木正成の銅像の寫眞。

取扱の實際

今日は「十四多聞丸」ですね。

靜かに讀んで下さい。

讀み終つた子は机上に本を置かせ、どんな內容であつたかを默想させます。

どんなことが書いてありましたか？。

「多聞丸が木で造つた龜に餌をつけておいて、友達を驚かした話です」

面白い話である上に、文章もよいので大意は樂に把握されます。

さうですね。このお話で、多聞丸はどんな人だと思ひますか？。

「りかうな人だと思ひます」

「とてもうまく工夫する人だと思ひます」

等、兒童の感想を發表させて、多聞丸の人となりについて推察させます。

多聞丸はとても工夫ずきの人でした。大きくなつてから、時の天皇樣にお仕へして、このすばらしい工夫力で賊軍をさんざんに打ち破つた人です。

楠木正成といふ人のことを聞いたことがありますか。

楠木正成について兒童の發表を求めます。それを中心にして話をすすめて行きます。

今から六百年ほど前のことです。その時の天皇様は後醍醐天皇と申しあげます。楠木正成は後醍醐天皇に忠義をつくした人です。その頃惡者どもがはびこつてゐたのです。その惡者どもを赤坂城や千早城に集めた正成は、小さい時から持つてゐた素晴らしい工夫力で、惡者共を散々な目に合はせたのです。こんな話もあります。高い梯子を城の石垣にかけて置きますと、攻めて來た惡者どもがその梯子に登つて來る所を、上から油をかけて燒き殺したり、大石をころがして負かしたり、藁人形で敵をすつかり馬鹿にしたり、とても戰爭の仕方の上手な人でした。正成は、自分だけが忠義をつくしたのではなく、其の弟の正季、子どもの正行・正時などと、家中の者が忠義を盡くしたので大忠臣として今の世までも尊ばれてゐます。

今宮城の外苑に正成の銅像が立つてゐます。

これが楠木正成の銅像です。

楠木正成の人となりを話すに際しては、その大要を語るだけでよろしい。

大忠臣楠木正成は小さい時の名を？

「多聞丸といひました」

多聞丸は八才の頃に、或お寺にあづけられました。それは和尚さんから勉强を敎へて貰うためでした。

このお寺に鐘つき堂があり、朝晩、ゴーン、ゴーンと鐘をならしました。

「朝だよ。寢坊してゐるなまけ者はないか、ゴーン」

「さあ、夕方だよ。夕飯までに歸るんだよ、ゴーン」

と、時をしらせたり、又、

「火事だよゴーンゴーン」「火事だよゴーンゴーン」

と、何か變つたことのある時につく鐘です。

或時のことです。村の人達が五六人この鐘の下に集りました。

「こんな大きな鐘を片手で動かすやうな人があるだらうか」

と、一人が言ひました。

「この鐘。……それはないさ」

と一人の返事です。

「とにかく大きいからな！」

「動かせますよ」

「動かせる？」
「誰だい動かせるつてのは」
「私です」
「私って？」
「なあんだ。多聞丸さんか」
少年を見下すやうな眼つきをします。
「私なら動かせます」
頭を上方に向けて大人に話かける動作です。
「あなたが？」（再び見下すやうな動作です）
村の人達は、多聞丸がとても賢い子どもであることは知つてゐましたが、幾ら智慧があつても、まさかと思ひました。
「大人の私達でも出來ないのに、まさか子どもが」
といつて相手にしません。
「いいえ、動かして見せませうか……片手でなしに指一本で」
「え？　指一本で動かすつて？」

「やつて見ませう」
村の人達は動くものかと思ひながらも、鐘にさつさと近づく多聞丸がどんなことをするかと見てゐました。
多聞丸は、小さな人さし指で大きな鐘を靜かに押しては、放しました。鐘はグラグラグラッと動いたかと思ふと、どうして少しも動きません。
「それみたことか。指一本でなんていつても」
と村の人達は思ひました。が、多聞丸の顏はいかにも平氣です。また押すのです。
二回、三回、五回、十回。
何遍か繰り返してゐるうちに、どうです。少しづつ鐘がゆれ始めたのではありませんか。
「搖れて來た、搖れて來た。これは驚いたぞ」
村の人達は多聞丸の小さな指が不思議な力を持つた指ではないかと思ひ始めたのです。
多聞丸はまだ止めません。五十回、六十回。とうとう誰の眼にもわかるやうに、大きく搖れ出したのです。
村の人達はどうだつたでせう。
「すつかり驚いて仕舞ひました」

多聞丸の指に何かしかけがあるのではないか（指を見つめる動作をして、不思議だといはぬばかりに首をかしげる動作）と、あらためて見なほしましたが、なんのしかけもありません。多聞丸はニコニコしながら

「小さな力でも何度もやればゆれるのです。鐘はつり下げられてゐますから、小さい力でも少しづつゆれて、しまひには大きく動くのです」

といふと、村の人達もすつかり感心してしまつたのです。大人でも氣がつかないことを多聞丸は？

「きづいてゐます」

それは多聞丸がどんな小さいものでもよく見て、どんなになつてるかをよく考へる人だつたからです。

さあ、一度本を讀んで貰ひませうか。〇〇君讀んで下さい。

多聞丸はよく觀てはよく考へ、よく工夫して色色なものを作るのがとても好きでした。

或日のこと、多聞丸は自分の室で、何かこしらへてゐました。わき目もふらずに木を切つたり、削つたり、掘つたりしてゐました。

やがて出來あがつたのをみると？

「小さい龜でした」

その龜をどうしましたか？。

「多聞丸はそれを持つて池へ行きました」

さうするとどうでした？。

「近所の子どもたちが四五人集まつて來ました」

近所の子が四五人集まつて來たのですね。

「何をしてゐるの」

「龜をこしらへたんだよ。よく見てごらん」

「うまいね」

「この龜はただの龜ぢやないんだぜ」

「ただの龜ぢやないつて」

「動く龜だぞ」

「嘘をつけ。木の龜が動く筈がないよ」

「動かしてみやうか？　生きてるやうに」

「本當かい？」

これらの對話は首を左右にするだけでよいでせう。主人公は左の方から右、從たる者は右の方から左にするのが普通です。これは兒童からは右が主人公、左が從たる者になります。これは、眼は左右均等に見えるや

うでも實は右の方が見易いものでありますからです。

芝居演劇など、オペラのやうな外國のものでもすべて舞臺は右を上座にしております。これは期せずして眼の自然から來たものと思はれます。

水に浮かんだ龜に向かつて、（手を合せて目をつぶり、亀に心を入れるかの如く口の中でわけのわからぬことをブツブツ云ひながら、パット目を開き、ぽんぽんと手をたたきます）

「動いたぞ。動いたぞ。あれ木の龜が動いたぞ」

驚きの聲です。兒童はここで笑ひます。兒童はしかけを知つてゐますから、この驚きと前の龜に心をふき込む樣子とで笑つて仕舞ふのであります。

皆が驚いて目をみはつてゐますと、多聞丸はニコニコしながら、

「今度は龜を呼んでみやう」

といつてばらばらと餌を撒きました。

すると龜は多聞丸の云ふ通りです。ぼかりと動いて、ぐるぐる泳ぎ廻ります。

子どもたちはすつかり呆れてしまひました。

「不思議だね」

「不思議だ」

とお互に、生きてるやうな龜にすつかり驚いて不思議がつてゐます。

この龜は鮒を釣るよ。釣らせてみようか」

「え？。鮒を釣るつて」

子供達は益々わけがわからなくなりました。

動くだけでも不思議なのに、ぐるぐる廻つたりする。それに今度は龜が鮒を釣るといふのですからたまりません。

皆狐に魅されたやうな顔つきです。

多聞丸は平氣な顔で龜をそばに引き寄せます。子供達は不思議に思ひながら、龜をぢーつと見つめてゐました。靜かに引き上げました。

「あ！　鮒だ。鮒だ。鮒が釣れた」

「木の龜が鮒を釣つた」

見ると、龜の腹には一本の長い馬の毛が結びつけてあります。さうしてその先には鰭をつながれた鮒がぴんぴんはねてゐます。

「なあんだ」

と、始めて村の子どもたちは顔を見合せて笑ひました。しかし誰もが工夫の上手なのにすつかり感

心して仕舞ひました。

これらの話の中に、見てゐる子供達の不思議と、多聞丸の得意の場面とを感じさせねばなりません。

多聞丸はどうだつたでせう。

「得意でした」

「とても愉快でした」

得意でした。そして心も晴れ晴れとしてゐました。しかしどうでせう。多聞丸は村の子どもに對して、「どうだみんな、僕の眞似は出來ないだらう」なんて威張つたでせうか。

「いいえ、少しも威張りませんでした」

仕掛けを見せないのなら威張つてゐたかも知れませんが、しまひには仕掛けを知らせたのですね。多聞丸は驚かせはしても、すぐそのたねをあかしてくれます。それは多聞丸の心の中がきれいで美しいからです。

でもこれまでになるには、きつと一度や二度は失敗してゐるかも知れませんが、根氣よく工夫を續けて、とうとう出來たのでせう。

皆さんも玩具（おもちや）のビックリ箱を作つたことがありますか。

等によりて、工夫創造したことを自由に發表させます。

さういふ物を作る時には、先づ第一にどうしたらよいと思ひますか。

「よく考へます」

「よく工夫します」

よく考へるのですね（よく考へる　よく工夫する、と板書します）

「つくる順序をきめます」

作る順序をきめる。なる程これも大切ですね。（つくる順序と板書します）

材料などはどうでせう。

「使はれないで捨ててあるやうなものをなるだけつかひます」

使へないから、捨ててあるやうなものを使ふ。成る程これも大切です。此の前の時間に「一つぶの米」では金次郎は、捨ててある土地に、捨ててある苗で、捨てられない大切な實を作つた話でしたね。さういふ捨ててあるものを廢物といひます。廢物を利用するんですね（廢物を使ふと板書します）

それからもうありませんか？

「新しく買つたり、贅澤なものを使ふことはやめます」

贅澤なものを使はない。これも大切なことですね。

工夫したものは何か役に立つものでなければなりませんね。こんど一つ、工作の時に何か作つて貰

はうかな。

整理の時には、板書を中心にいたします。

尙、兒童の工夫・創造したものが實際にあれば、大いに推奬しておきます。

十五　消防演習

本文

けたたましいベルの音がしました。小使さんが、かねをふりながら、走って來ました。火事の知らせでした。

私たちは、前から先生に、教へられてゐたやうに、急いで窓をしめました。だうぐも何も持たないで、教室を出ました。

二列にならび、足もとに氣をつけて、かいだんをおりました。みんな、左の手をポケットに入れ、右手にハンケチを持って、口をおさへながら、學校の門を出ました。

先生が、一通り、人數をおしらべになりました。みんなゐることがわかったのでまた歩きだしました。

學校からあまり遠くない、あき地まで來ました。

先生が、

「番號。」

といはれたので、私たちは、はっきりと番號をかけました。

みんな、あわてないやうに氣をつけて、學校の方を見てゐました。そのうちに、高等科の生徒が、二人かけて來て、

「急いで校庭に集れ。」

といってすぐ引き返しました。私たちは、先生について學校へかへりました。運動場には、消防自動車が來てゐました。警防團の人たちが、元氣よく立ちはたらいてゐました。

ホースが、むくむくとふくれたかと思ふと、まもなく、水が勢よく出始めました。

水は、だんだん高くなって、屋根よりも上へあがりました。教室に水がはいらないかと、しんぱいしてゐると、間もなく水の出るのがやみました。

私たちは、消防自動車が見えなくなるまで、見送りました。

要旨

わが國は、所謂、季節風地帶にあつて、種々の風土的特異性があります。ヨイコドモ下の「アラシノ日」の如き二百十日頃の颱風もそれであります。また世界有數の地震國でもあり、且つ家屋が木造であることも手傳つて、大火災を惹起したりしたことは度々であります。そればかりでなく現在の如く戰爭中では、當然空襲のあることを覺悟せねばなりません。このやうな非常事態に際會しても、國民一般が徒らに狼狽その度を失ふといふやうなことなく、一糸亂れぬ統制下にあつて、沈着果斷かつ敏捷に行動して、災害を最小限度にくひ止め、國土防衛に遺憾なきを期するやうに、平時に於いて物に動じない膽力と、如何なる事態に晒されても落付いて事を行ふ態度と、集團訓練を狙つた教材であります。

取扱の中心

本課を取扱ふに當つて、教材のどこに重點を置いたらよいでせうか。教師用書に據れば、本教材に於て指導すべき主要事項は、

○一、非常の場合は、おちついて敏捷に行動すること。

○二、學校で火災その他非常の場合に遭つた時は、すべて教師の命令によく從ふこと。自分勝手な行動をしないこと。

三、警防團等の活動中、邪魔にならないやうにすること。」

○四、其他非常事態の際の心得。

○五、火の用心をすること。

六、警防團に關する概略。

以上でありますが、○印の附いた條項が指導の重點であります。此の期の兒童は、學校にも慣れて來てをりますから、先生の指圖に從つて避難することが何よりも肝要である點に指導の力點をおくのが至當であります。

取扱上の注意

一、學校や隣組に於いて行はれる待避訓練や防空訓練に結んで、本課指導の目的を達成するやう實踐指導が必要であります。

二、家屋の大部が木造である我が國にとつて、火災は如何に恐るべき結果をきたすものか、火災の原因や被害狀況等について知らせなければなりません。そのためには附近の消防署等について調査しておく必要があります。

三、十二月一日の防火日と連絡し、防火についてのポスター、標語等を作らせることも必要であります。

四、災害避難の集團訓練には沈着・靜肅・忍耐・大膽・機敏を主とすべきでありますが、其の中でも特に必要なのは靜肅であります。指揮者の命に絶對服從すべきことは勿論ですが、靜肅であれば落ち着きも出、判斷もあやまらず、指揮者の命令の徹底も期せられるのであります。

尙、避難方法は、階上の場合と階下の場合とについて其の學級にあふ指導をしておかなければなりません。

時間配當

三時間。

準備

掛圖（後期用第九・十圖）

防火ポスター展（學級でいたします）

防火標語展（學級でいたします）

防火かるた（これは文と共に繪までかかせます）

一ヶ年間の火災の損害調査書。

火災原因の調査表。

取扱の實際

今日は「十五消防演習」ですね。どんなことが書いてあるか、靜かに讀んでみませう。

讀み終つた者は机上に本をおかせ、どんな內容であつたかを默想させます。

どんなことが書いてありましたか。

「學校に火事が起つた時の演習で、生徒が先生の敎へを守つて、避難しました。その時消防自動車が來て、警防團の人達が働いたことが書いてあります」

等、大意を把捉させます。

消防といふのは、火事があつた時に火を防ぎ火を消すことですね。それはいざといふ時に、あはてないで早く、上手に火を消せるやうに、何事もない時に練習しておきます。これを消防演習と申します。

學校でもこれまで度々練習しましたから、皆さんはよく知つてゐますね。

十五課は、此の子の學校で消防演習があつたことを書いた文ですね。

一番始めに、けたたましいベルが鳴つたのですね。これは此の學校では非常用のベル……何か、かはつたことがあることを知らせるベルです。……私達の學校に大變なことが起つたから氣をつけよといふ知らせのものはどんな合圖ですか。

「ベルを三度づつ幾度もならします」

私達の學校では〇〇君の言つた通り「ジー。ジー。ジー」と三度づつのを幾度もならせますね。

さうすると、私達はどうするんでしたか。

「次の報らせがあるまで一言も口をきいてはなりません」

「庭で遊んでゐる時は、其の儘の姿勢で一言も口をきかずにゐます」

「體操してゐる時は、そのままで次の報らせをまつてゐます」

よく憶えてゐましたね。非常用のベルがなると、どんなことが起つても一言も口をきかず、先生の御命令までは一切動かずに、靜かにしてゐるのでしたね。此の子の學校でも同じです。

何故かうするかといへば、その譯はかうです。若しワアッと騷いだのでは、どんなことが起つたのか判らなくなるばかりか、先生のおつしやることが聞えません。

さあ、さうなると大勢の皆さんが、あはてて仕舞つて、思はぬ怪我をすることになります。

此の子の學校の生徒は、前から先生に敎へられてゐた通りにしてゐますね。

先づ第一にどうしました。

「急いで窓を閉めました」

急いで窓を閉めましたね。

先づ第一に窓を閉めるのはどうしてでせう」

「燒けないやうにです」

この程度の答だけで結構です。此の期の兒童には一寸むづかしい質問です。

窓が開いてゐると、火の子や煙が教室に入り込んで來るからですね。

先づ燒けないやうに窓をしめる。

それから第二には、

「道具も何も持たずに教室を出ました」

大急ぎで、左側と右側の人は窓をしめて、靜かに教室を出ます。

お道具は？

「持ちません」

お道具などに氣を取られてゐたら？

「燒け死んでしまひます」

早く避難することが一番大切ですから、お道具などはそのままで何も持たずに出ます。

誰一人口をきく人もありません。先生に前から教へられてゐる通り、二列に並び、足もとに氣をつけて階段をおりました。みんなはどんな風にして歩きましたか。

「左の手をポケットに入れました。右手でハンケチを持つて、口をおさへながら學校の門を出ました」

左の手をポケットに入れたのは、先生におつしやられたからでせうか。

「いいえ、前から教へられてゐた通りにやつたのです。その時に先生からおつしやられたのではありません」

さうですね。

前から先生に教へられてゐた通りにやつたのですね。

これは前の人を押したり、我れ勝ちに出たりしてはいけないからです。かうしないとあわてた時についた左の手や右の手で人を押しのけたり、前の人の肩に手をかけたりして、却つて早く避難が出來ないからです。

學校の門を出てからはどうでした。

「先生が人數をお調べになりました」

先生が人數をお調べになりました。

みんな無事に避難が出來たかどうかをお調べになつたのです。

一人でも居ない時は大變ですね。

人數はみんな合ひましたのでどうしました。

「また歩き出して、學校からあまり遠くない、空地まで來ました」

そこで先生は、改めてまた人數をお調べになりました。

みんな、あわてないやうに氣をつけて、學校の方を見てゐました。そのうちに高等科の生徒が二人來たのですね。さうして、

「急いで校庭に集まれ」

といつて直ぐ引き返したのです。」

私達はどうしました。

「先生について學校へ歸りました」

學校はどんな風でした。

「運動場には、消防自動車が來てゐました」

「警防團の人達が、元氣よく立ち働いてゐました」

さうですね。學校が火事だと云ふので消防自動車が來て、警防團の人達が元氣よく消防をしたのですね。

ホースがどうでした。

「むくむくとふくれたかと思ふと、間もなく、水が勢よく出始めました」

むくむくとふくれたかと思ふと、凄い勢で水がほとばしり出ました。

學校の屋根よりも高く上つたのですね。

皆はどんなことを心配しました？

「教室に水が入らないかと心配しました」

上手に火を消していただきました。

もう水もいりません。まもなく水の出るのが止みました。

私達はそれからどうしました。

「消防自動車が見えなくなるまで見送りました」

消防自動車を見送つてから、どうしたと思ひますか。

「教室に入りました」

「その日の演習がよかつたかどうか、先生からお話がありました」

さうですね。皆さんの避難の仕方がよかつたかどうか、先生から御話がありました。

先生の御話はどんなことだつたと思ひますか？

「早く窓をしめてよかつたとおつしやつたと思ひます」

「靜かにお話一つせずに、教室を出たといつておほめになつたと思ひます」

「二列の並び方がよかつたとおつしやいました」

「あわてずに左の手をポケットに入れ、右手でハンケチを持ち、口をおさへたのもよいとほめられました」

等々兒童の發表により、必要だと思はれることの要點だけを板書して行きます。尙足らぬ點を補說して書き加へます。

避難演習で先生のおつしやつたと思はれることはこんなことでせうが、その中でも一番大切なのはどれでせう。

「靜かにして一言も口をきかぬことだと思ひます」

「早くすることだと思ひます」

「落付いてすることです」

等々、兒童に發表させて、それらを十分に比較研究させて、「靜かにすること」が一番大切であり、それに次いで「先生の敎へを守つて早くする」ことが大切であることを知らしめます。

避難の必要は火事がおきたり空襲された時などです。日本の家は大體木造……木で造つてありますから、燃え易いのです。

一年中に日本でどの位火事のために家が燒けるかといふと、それは大變なものです。それに加へて日本は地震が多い爲に火事を起します。

今から二十年ほど前にあつた關東の大地震では、東京・横濱の大部分が燒けて仕舞つたこともあります。

どんなことで火事になるかと云へば、大抵は不注意からです。

ことに多いのは、子供の火いたづらです。子供が火いたづらをしてゐて大火事になつたことは澤山あるのです。

火いたづらは絶對にしないことです。

風呂のたきつけ場の始末、竈の火の始末、提灯の火、蠟燭の火、そんなことに氣をつけることを火の用心といひます。火の用心をして、火事を出さぬやうにいたさねばなりません。

もし火事になりさうなのを見たらどうします。

「火事だ火事だと大聲を出します」

「鐘や太鼓をならします」

「消します」

消すよりも何よりも眞先に、大聲で「火事だ」「火事だ」と云ふことが一番大切です。

この期の兒童に對しては、火災發見の時には消防よりも出火報知の方が大切であることを指導します。

消防署の人や警防團の人が來たらどうします。

「手傳ひます」

「邪魔にならぬやうにします」

邪魔にならぬやうにすることが大切です。御手傳よりも邪魔にならぬやうにします。この邪魔にならないことが皆さん位では大事な御手傳なのです。

水を持つて來たり、物を運んだりするのも御手傳ですが、それよりも邪魔にならないことも御手傳になるんです。

其の他、地方の事情、學校の事情等に應じ、地震による場合、空襲の時の注意など、細大もらさず教へねばなりません。そして最後に又重要な指導事項にかへつて整理します。

尙、學校でしてゐる避難演習に際しては、本課の目的の徹底を期すべきは勿論であります。」

十六　日の丸の旗

本文

どこの國でも、その國のしるしとして、旗があります。日本の旗は、日の丸の旗です。朝日が、勢よく、のぼって行くところをうつした旗です。

若葉の間にひるがへる日の丸の旗は、いかにも明かるく、海を走る船になびく日の丸の旗は、元氣よく見えます。

青くすんだ空に、高々とかかげられた日の丸の旗は、いかにもけだかく、雪のつもった家の、軒先に立てられた日の丸の旗は、何となく暖く見えます。

日の丸の旗は、いつ見ても、ほんたうにりっぱな旗です。

祝祭日に、朝早く起きて、日の丸の旗を立てると、私どもは、

「この旗を、立てることのできる國民だ。」

「私たちは、しあはせな日本の子どもだ。」

と、つくづく感じます。

日本人のゐるところには、かならず日の丸の旗があります。どんな遠いところに行ってゐる日本人でも、日の丸の旗をだいじにして持ってゐます。さうして、日本の國のおめでたい日や、記念の日には、日の丸の旗を立てて、心からおいはひをいたします。

敵軍を追ひはらって、せんりゃうしたところに、まっ先に高く立てるのは、やはり日の丸の旗です。兵士たちは、この旗の下に集って、聲をかぎりに、「ばんざい。」をさけびます。

日の丸の旗は、日本人のたましひと、はなれることのできない旗です。

要旨

我が國に於いては日の丸の旗を以て國家の標識とし、國民精神の象徴としてゐることを感得せしめて、盡忠報國の念に燃えしめるところに本教材の狙ひがあります。

取扱の中心

本課を取扱ふに當つて、教材のどこに重點を置いたらよいでせうか。教師用書に據れば、本教材に於いて指導すべき主要事項は、

一、どこので國も、その國のしるしとして旗があること。日本の旗は、日の丸の旗であること。

二、日の丸の旗は、朝日が勢よくのぼつて行くところをうつしたものであること。

三、祝祭日には、日の丸の旗を立てること。

○四、日の丸の旗は日本人のたましひとはなれることのできない旗であること。

以上でありますが、兒童用書を熟讀いたしますと、「この旗を立てることの出來る國民だ」「私達は、しあはせな日本の子どもだ」といふ感じを強く自發的なものにすると共に、○印の「日の丸の旗は、日本人のたましひとはなれることのできない旗であること」に重點をおいて指導すべきであります。

取扱上の注意

一、我が日の丸の旗の制定は明治三年一月二十七日太政官布告第五十七號にて公布されたのでありますが、それは法文化した國旗制定であつて、日章旗は可成り前から使用されてゐたのであります（備考欄參照）。惟ふにこれは、我が日本は日の本であり、日の神の直系の御子孫のしろしめす國であり、日本人は日の神の末裔であるとの信念から、自づと生まれたものであります。外國の旗は、獨立の記念を現はすとか、自由平等や博愛を現はすとかで、とかく理想等を現は

してはありますが、諸外國の國旗は皆いづれも新しく作つた國旗であります。わが日の丸のやうに國民の間に自然に生まれたものを、單に統一したにすぎない所の我が國の國旗とは其の發生に、甚だしく差があります。いはば我が國のは自然に生まれた國旗であり、外國のは理念的に作られた國旗といへるのであります。

隨つて、日の丸の旗の由來について說かうといたしますれば、皇統連綿たる國史と國土國民性等のすべてに關聯があります。

本課の取扱に當つてはこの點に思ひをいたし、國民精神の反映たる日の丸の旗について十分感得せしめるやう、注意しなければなりません。

二、本教材を取扱ふ上に注意せねばならないことは、この期の兒童は未だ國史に關する十分な理解をもつてをりませんから、國旗の由來などに深入りすることはさけなければなりません。

勿論國旗に現はれた日本精神、忠誠・圓滿・和合・熱血・勇氣・純潔・正直等には觸れなければなりません。しかしこれとても餘り多くあげることは兒童に混亂を與へることになりますから、「和を愛すること・忠誠であること・正直であること」等二三のものに限つてその精神の徹底を期するやうにいたします。

三、本課を一月初めの新年に於て指導するやうに編纂されてゐることは意義深いものがあります。

新年を迎へた喜びと感激のうちに本教材を通して、皇室の御繁榮を祈り、皇國民としての忠誠を更に强く培はねばなりません。

取扱に際しては此の年頭指導の意義を體し、年頭の行事、祝日大祭日についても其の精神を語り、皇國民としての喜び、自覺を喚起せねばなりません。祝日・大祭日については詳しく語る必要はありませんが、我が國體が祭政一致の國體であることにふれることを忘れてはなりません。

四、國旗揭揚についての（備考欄參照）禮法を實地に指導いたしますと共に、その尊重についても具體的に指導せねばなりません。

日の丸行進中の旗の持ち方、振り方、反古になつたり破れたりした時の始末についても十分なる指導を與へねばなりません。

時間配當

三時間。

準備

掛圖（後期用第十一・十二圖）

十六　日の丸の旗

實物の日の丸の旗と旗竿若干。
滿洲・支那・泰、等の諸外國の旗。

取扱の實際

今年は本當によいお正月でしたね。
畏多くも皇室におかせられても何のお障りもあらせられず、此の輝くよいお正月をお迎へになりました。

嚴然とした語調で申します。勿論教師が態度を改めて申しますれば、兒童も自づと緊張して姿勢を改めます

さうして天皇陛下は、元日の四方拜にも三日の元始祭にも神樣の前に、「よい年を迎へました。日本の國がますます榮えますやうに。國民の一人一人が皆幸福になれますやうに。どうぞ神樣御守り下さい」
と私達國民の幸福をお祈り下さいました。
このやうに天皇陛下は國民のことばかり御心にかけさせ給ふのであります。
皆さん、このやうな天皇陛下を戴いてゐて、どう思ひますか。
「有り難いと思ひます」

「忠義をつくさねばなりません」
兒童の强い意志が現はれます。教師はこの緊張した空氣をのがしてはなりません。引續いて語調も强く感激と共に次に移ります。
有り難い天皇陛下。（ここで實樂を切ります。有り難い天皇陛下を戴いた私達はなど申しては弱くなります）
皆さん一緒に先生につづいて下さい。
「身體を鍛え心を鍊つて」
「身體を鍛へ心を鍊つて」
「天皇陛下にお仕へします」
「天皇陛下にお仕へします」
よいお正月で、お餅を食べたり、凧をあげたり、獨樂（こま）を廻したり、樂しいお正月にどんな飾り物をしましたか。
お正月の行事について發表させます。その話の中に必ず日の丸の旗をたてたことの回答を得ます。
日の丸の旗をたてたのですね。お正月のうちになんど位たてましたか。
等の質問から入つていきます。
日の丸の旗はどんな時にたてますか。

一月一日にたてました」

「國のお祝ひの時にたてます」

「國のお祭りの時にたてます」

「出征する人がある時にたてます」

等により國旗掲揚の場合を語らせ、それは私事の時には掲揚しないことに及びます。

さうですね。そんな時にたてます。

「皆さんの家の喜びごとにはたてますか。

「いいえ」

皆さんのお家のことにはたてませんね。

どうです皆さん。祝日や祭日に自分で國旗をたててゐる人？。

ほほう、偉いね。一年生の時に、國旗は皆さんがたてませうと教はつた通りやつてゐますね。

祝日や祭日に、朝早く起きて日の丸の旗を立てる時の氣持のよさ。ひらひら風になびいて朝日が昇るやうで、それを見ると本當に氣持がよい。

かうして祝祭日に朝早く起きて、日の丸の旗を立てるのを、子ども達は自分の役目にしてゐるかどうか、一年生以來導かれて來たことを實行してゐるかどうかを確かめて、まだ實行してゐない者には、實行の意欲を

起させねばなりません。

さあ一つ、日の丸のたて方をやつてみせて貰ひたいな。

用意した日の丸の旗と竿とで實習させます。

兒童は喜んで實習します。さうして門口に立てる場合は、右側（外からは向つて左）に立てることを指導いたします。一般の家庭では普通一旒でありますから、二旒の時とか、外國の旗と交叉する時等については、授業の最後に輕く觸れる程度で結構であります。要は門口にたてる場合を主として指導すべきです。

御本を讀んで下さい。

靜讀させます。讀終つた者は机上に本を置いて、どんな內容であつたかを默想させます。

どんなことが書いてありましたか？

「日の丸の旗のことが書いてあります」

此の課の大意の把捉は案外にむづかしいやうです。このやうな課では節を分けて、節意を把捉させるのも一方法であります。

何處の國でも、その國のしるしとして旗があります。

この旗は？

「滿洲國のです」

これは？

「中華民國のです」

これは？

等々外國の旗を出します。

此等は皆外國の國旗です。

日本の旗は、日の丸の旗です。朝日が勢よく、グングン昇つて行く所をうつした旗です。

日の丸の旗には私達日本人の心が現はれてをります。

ここの白地の所は、日本人のまじり氣の無いさつぱりした美しい心です。日本のさつぱりした美しい心が現はれてをります。（きつぱりした美しい心と板書します）

さうして此の日の丸は、まるい心……おだやかで仲のよいことを現はしてゐます（おだやかな、仲のよいと板書）

赤い色は忠義を現はしてゐます（忠義と書板）

旗の一つ一つには、日本人の心が現はれてゐますし、旗全體としてみると、朝日が元氣よく昇つて行くところです。

日本……（板書します）日の本と書くのですが、日の本の國、太陽の國、この國のしるしが日の丸の旗。

國の名と國のしるしの旗とが同じなのは日本の國だけです。

ここで外國の旗の意味を申してもよいでせうが、それらは、滿洲の五族協和をしるしとしたもの位で、ドイツ・フランス等の國旗についてまでも語る必要はありません。參考に備考欄にかかげてはおきましたが。

よその國のと、日の丸とを比べて見ませう。

これはなかなか大事な取扱ひであります。即ち複雜多彩な國旗と比較させて、我が日の丸の旗は簡明であつて、純一、形狀の圓滿優美なること、その象徴する意義の雄大純潔なる點、即ち國旗として最も傑れた特徴を有することを知らせなければなりません。

しかし、これは兒童に比較させ發表させてゐるうちに、兒童自身に見出させるのであります。先生がそれをお話でして仕舞つたのでは効果がありません。

兒童は案外卒直に其の差を見つけ出しますから、それを先生が補說して行けば、如上の傑れた特徴をつかませることは至難ではありません。

どうでせう。日の丸と比べて？

「外國のはゴジャゴジャしてゐます」

「いくつも色がつかつてあります」

等の答が出ましたら、教師は之に一つ一つ「なる程ゴジヤゴジヤしてゐますね。日の丸はあつさりしてゐますね」とか「さうだ、大抵のは幾つも色が使つてあるが、日の丸は白と赤だけですね」とか、兒童のよい答に教師が同意することは、發表した兒童を喜ばせると共に、他の兒童の刺戟ともなります。かうして兒童を喜ばせることは、教師に親しみと信頼を寄せる結果ともなりますから、教師は時に及んで賞めること、同意を與へることを忘れてはなりません。

日の丸の旗は、〇〇君や〇〇君の言つたやうに、どこの國の國旗と比べても、たとへやうのない美しい國旗です。

青々とした若葉の綠の間にひらめく日の丸の旗はどうでせう。

「明るい旗です」（明るい旗と板書します）

若葉の頃とはいつ頃かね？

「天長節の時です」

「靖國神社の臨時大祭の頃です」

天長節とはどんな日でしたか。

「天皇陛下の御生まれ遊ばされた日であります」

さうですね。海を走る船は何時でも日の丸をたててゐますが、これはどんなに見えますか。

「元氣よく見えます」（元氣よい旗と板書します）

青く澄んだ空に……といふと何時頃でせう。

「秋です」

秋の頃ならどんな日に國旗を揭げますか。

「秋季皇靈祭」

「神嘗祭」

「明治節」

「新嘗祭」

等々により秋の祭日に觸れます。

その頃の日の丸はどんなに感じられますか。

「いかにもけだかく感じられます」（けだかい旗と板書します）

雪の積もつた頃は、丁度今頃ですね。

「紀元節の頃も雪があります」

さうですね。新年や、紀元節の頃雪のつもつた家の軒先に立てられた日の丸の旗は？

「何となく暖かく見えます」（暖かい旗と板書します）

朝日が勢よく昇つて行く所をうつした旗日の丸は、明るい旗です。元氣のあふれた旗です。けだかい旗です。暖かく感じられる旗です。

本當にいつ見ても立派な旗です。（日の丸はりつぱな旗と板書します）

有り難い天皇陛下を戴いた日本の國民。この旗を立てることの出來る國民それは私達です。

私達は日本に生まれたことを、どう思ひますか。

「有り難いと思ひす」

「しあはせだと思ひます」

この答は兒童の心からのものでなければなりません。教師の態度がこの質問の時に嚴然として居れば、この答は必ず生まれれて來ます。教師の態度によつて兒童はどうにでもなるのであります。兒童はいはば教師にとつて鏡であります。

日本人は日の丸を大切にいたします。

日本人のゐる處には必ず日の丸の旗があります。隨分遠い處、南米・カナダ・アメリカなどに、日本の人は働きに出てゐます。これからもどんどん、方方へ出掛けて日本の國威を輝かさねばなりません。それは皆あなた方のお仕事ですよ。

大東亞をつくり直すお仕事も、この日の丸の旗のもとです。

日の丸は進む、日本人と共に進む。

ここで國威の發揚と國民の海外發展にふれ、新しい世界の建設に對する兒童の覺悟を促がします。

どんな遠い處に行つてゐる日本人でも、日の丸を大事に持つてゐます。さうして日本のおめでたい日や記念の日には、日の丸の旗を立てて、

「天皇陛下萬歳」

と心からお祝ひをいたします。

敵軍を追ひ拂つて、眞先に立てるのは日の丸の旗です。さうして兵隊さん達は、この旗の下に集まつて天もさけよと萬歳を叫びます。

日の丸の旗を打振つてる兵隊さんを映畫で見たことがあるでせう。

日の丸は進む。日本人と進む。（板書します）

日の丸の旗は日本人の魂とはなれることの出來ない旗です。

も一度本を讀んでみませう。

朗讀の上手な子に讀ませます。さうしてこれから整理に入ります。指導すべき主要事項に一つ一つふれますそれが終つてから、禮法上の指導をいたします。

（イ）日の丸の旗の取扱ひは、ていねいにすること。

（ロ）よごしたり、おとしたりしてはならないこと。
（ハ）行列などの時の紙の旗は特に氣をつけること。
（ニ）外國の國旗にも敬意を表すこと。
（ホ）國旗をかざりに用ひてはならないこと。
（ヘ）私事には立てないこと。

備考

一、日の丸の標識は、朝廷に於ても日月幢等に行はれ、諸家の旗標としたものもなく、秀吉の時、御朱印船に日の丸の旗を揚げた事が記錄され、又後醍醐天皇の創業にかかる日章旗が傳へられたといふが、古來我が國は對外關係が少なかつたため、國旗といふ觀念は頗る漠然としたものであつた。幕末に至つて諸國との交通が開け、島津家で新造した船舶の旗標として白帆毎に朱の日の丸を印した事に端を發し、安政元年水戸齊昭の建議によつて、日章旗を日本の船標とした。明治維新の後に至つて、政府は國旗を制定して、その制式用法を示すの必要があり、明治三年正月二十七日大政官布告第五十七號を以て郵船、商船規則を公布した。その中に日本船舶に揚げる國旗は白布地に日の丸とし、旗は大中小の三種に分つて、その寸法を定め、祝祭日には大旗、平日には中旗もしくは大旗を揚げることとした。その寸法は次の如きものである。（現在もこの寸法に準據す）

（一）横を一〇〇とすれば縱を七〇とす。
（二）日章直徑は縱の五分の三とす。
（三）日章の中心は旗面の中心より横へ百分の一旗竿の側に近寄る。
（風になびく時日の丸の昇るが如き感を起す。即ち朝日の象徴にしてもし日章の中心が旗面の中心より下れば落日の如き感を生ずるものなり）
（四）日章上下のあきは等しくす。

二、國旗揭揚の仕方

（イ）門口に立てる場合は右側（外から向かつて左）に立てる。二旒を揭げる場合は左右に並立する。
（ロ）外國の國旗といつしよに立てる場合は、日の丸の旗を右（外から見て左）とする。
旗竿を交叉する場合は日の丸の旗の旗竿を前にし、その本を左方（門外から見て右）とすること。

十七　冬

本文

冬になって北風が吹き始めると、草は土の下で眠りにつき、木は葉をすっかり落して、冬ごもりの用意をします。さびしくなった田や畠の中では、寒さに強い麥だけが、青いうねを作ってゐます。

子どもたちは、風の中に立って、ゐせいよく麥ふみをします。

麥ふめ　ほうい。　麥ふめ　ほうい。

麥はふまれると、根がいっそう強くなるのです。根を深くはって雪やしもにも、たへしのんで、強い底力をやしなひながら、春の來るのを待ちます。

麥ふめ　ほうい。　麥ふめ　ほうい。

子どもたちの勇ましい聲は、北風にのって、遠くまで聞えて行きます。

山には、早くから雪がつもって白くなります。雪は、だんだん、平地にも降って來て、地面をも、まっ白にします。

雪のたくさん降る地方では、つもった上にも、つもって、家の軒先まで、とどくやうになります。

子どもたちは、スキーで列を作って、元氣よく、學校へ通ひます。みんな、はげしい寒さに負けないで、樂しく雪國の冬をくらすのです。

雪の降るころには、海の色は暗く、波は高くなります。波は、いその岩にくだけて、まっ白いしぶきを立てます。

しほ風は身を切るやうに、つめたいものです。いそべの松が、しほ風に吹かれて強くなるやうに、海べの子どもたちは、寒い波風にきたへられながら、強くなって行きます。

冬はどこにゐても、強くなるのに、よいきせつです。ををしい氣持でくらすのに、よいきせつです。

要旨

これまでの「春」・「夏の夕方」・「秋」の後をうけて、冬のきびしい寒さに耐えて、兒童の心身鍛錬を狙ひ、強く逞ましい子になることが天壤無窮の皇運を扶翼し奉る所以であることに氣づかせ

る教材であります。

取扱の中心

本課を取扱ふに當つて、教材のどこに重點を置いたらよいでせうか。教師用書に據れば、本教材に於いて指導すべき主要事項は、

○一、日本の冬の情景。一層つよい、ををしい子どもになること。
二、農村の子どもたちは麥ふみをして、勇ましく暮すこと。
三、雪國の子どもは、元氣よく學校へ通つて、はげしい寒さにも負けないこと。
四、海べの子どもたちは、寒い波風に鍛へながら、強くなること
○五、冬には寒さに負けないで、どこにゐても一層つよい、ををしい子どもになること。
○六、つよくなるための實踐指導。
(1) 就寢・起床の時刻を一定すること。
(2) 戸外運動につとめること。
(3) 父母のいひつけを守つて元氣に働くこと。
(4) 手・體・足をきれいにすること。
(5) 含嗽して風邪に罹らぬやうにすること。
(6) どんなつらいことがあつても忍耐すること。
(7) 厚着をしない。手袋などはあまり用ひないこと。

以上でありますが、これを見ますと本課の指導は大變です。こんなのを重點もきめずにかかつたらだらだらの授業になります。勿論指導はするのでありますが、かう盛り澤山のものを平均に取扱つてはなりません。意志の鍛錬、身體の鍛錬を主として、積極的に丈夫にすることに重點を置いて、指導するのがよいと思ひます。即ち○印のついた箇所が重點でありませう。

取扱上の注意

一、強く、逞ましい子になれと要求する本教材は、ヨイコドモ上の「ツヨイコ」ヨイコドモ下の「五月ノセツク」の發展教材であります。又本書三で指導した「日本の子ども」とも呼應するものであります。

昭和十四年五月二十二日青少年學徒に賜はりました勅語に「汝等其レ氣節ヲ尚ヒ」と仰せられまた「文ヲ修メ武ヲ練リ質實剛健ノ氣風ヲ振勵シ」と仰せられ「以テ負荷ノ大任ヲ全クセンコトヲ期セヨ」と宣はせられた聖旨のほどを畏み仰いで、本課の指導に當らねばなりません。

二、本教材は寒風吹きすさぶ冬の叙景を、野・山・海について行ひ、順次に兒童の實踐場面を用意

してをります。しかしいづれも潑剌たる元氣、力强く耐へ忍ぶ底力を求めるものであることには變りがありません。よろしく鄉土の實際と結ぶとともに、また日本全體の冬の情景について理解させ、雄々しい氣持を續けるやうに、兒童を動かす工夫が肝要であります。

三、冬の寒風、きびしい寒さは自然のめぐみであることに氣づかせ、冬の寒さに感謝の念を持たせねばなりません。國土愛はこの感謝の心の現はれであります。

四、冬の情景は各地それぞれ相違してをります。山國の者にとつては海に、海邊の者にとつては山國に理解し得ないものがありませう。又雪國と雪國でない者にとつても冬の情景に理解し得ないものがありませう。しかしこれらに適當な說明を加へて、日本地理理解の芽生を作らねばなりません。

五、東京都のやうな大都市の兒童に冬の麥畑、麥ふみを知らしめるのは困難であります。

時間配當

三時間。

準備

掛圖（後期用第十三・十四圖）

映畫「冬」

冬の情景の圖畫、綴方を課す。

取扱の實際

隨分寒くなつて來ましたね。

氷が張つたり、霜が置いたり、風がつよい日が續いたりして、寒くて寒くてたまらない日だなんて炬燵（こたつ）の中に入りこんでばかりゐるんぢやないかな。

炬燵の中に入つてばかりゐる人などと問ふて手を擧げさせるよりも、この程度で打切つた方がよいのです。

さあ十七「冬」、靜かに讀んでみませう。

靜讀させます。讀終つた者から机上に本を置かせ、どんな內容であるかを默想させます。

どんなことが書いてありますか。

「冬のやうすが書いてあります」

「寒い冬の野原や海や雪のことが書いてあります」

この文章はよい文章ですが、兒童には大意把捉は無理であります。內容は斷片的でありますから、更にも一度音讀か靜讀をさせるのがよいと思ひます。」

も一度靜かに讀んで、どんなことが書いてあつたか、しつかり御答へして下さい。

「田や畠には寒さに强い麥があつて、子どもたちが『麥ふめ　ほうい　麥ふめ　ほうい』と麥ふみをしてゐます。

さうですね。……農家の子どもの麥ふみですね。

「山國の子どもたちがスキーで學校に通ふことが書いてあります」

「海べの子どもたちが寒い波風にきたへられて强くなつて行くことが書いてあります」

冬の間の、農村の子どものこと、山國の子どものこと、海べのこどものことが書いてありますね。

そこに住んでゐる子供達はどうなんでせう。

兒童の答には詳しいものがありますが、結論的に非常に元氣であること、寒さにまけてゐないことにまとめあげます。

寒さにまけない元氣な子ども。

どうだね。お家で炬燵の中にもぐり込んでゐるんぢやないか。」

「いいえ」

遊ぶ時は、外に出て遊んでゐる人。

これは擧手させます。

よーし。

安心した。それでこそ日本の子ども だ。

世界を導く日本の子ども だ。

强く感動的に申します。

寒い冬。冷たい冬。手のかじかんで鉛筆で字もかけない朝。そんな時でも皆さんはお家の御手傳をしてゐますか。

どんな御手傳か一應聞きただします。」

〇〇君はどんな御手傳ですか。

二三兒にきいて寒い頃でもよく手傳をしてゐる子をほめておきます。

寒いのに、よくお手傳が出來ますね。

弱い子なら「寒いから嫌だ」なんて言ふでせうが、强い子はそんなことは言ひません。

外で元氣に遊びますか。

この頃どんな外遊びがありますか？

外遊びの調査をします。

寒さに負けずに外遊びして身體を鍛えるのはよいことです。

「寒い冬」とは弱虫の言ふことですね。

鍛える冬。丈夫にする冬。かういふのが強さうですね。

鍛へる冬、丈夫にする冬、と板書します。

日本の冬はとてもいい冬なんです。この冬があればこそ日本人は強いのです。

冬……寒い冬……それは丈夫になる冬です。

この冬があるのは神様のおさづけです。

北風が吹き始めると草は土の中で眠りにつきます。木の葉も落ちてしまひますから、なんだかみんな冬に負けて死んで仕舞つたやうでせう。

どうして、どうして……草も木も、春が來たら芽を出すぞ、花を咲かすぞと、冬の間ジット怺えて我慢してるんです。

草も木も冬にはまけません。ジット我慢の冬です。

「鍛える冬、丈夫にする冬」の次に「がまんの冬」と板書します。

冬の寒さが嚴しければ嚴しい程、益々強くなるのが日本の子どもです。

世界を導く日本の子どもの強さは、冬が育ててくれるのです。さうすると冬は嫌なものかな。

「いいえ、僕達を強く育ててくれるのですから恩人です」

冬の寒さに對して感謝の念を持たせることが必要です。これが國土愛の現はれであります。

教師用書に「違つた土地の冬を經驗した子どもが學級にあれば、その話をさせるなどして、各地の冬の情景を子どもの腦裏にえがき出させ、神國日本の冬の惠みについて知らせる」とありますから、その取扱ひをいたします。

違つた土地の冬を經驗した子どもに、その話をさせて、どちらの冬がよいか比較させるのも一方法ですが、若し此の土地の方が惡いといつても、その中から此の土地のよい點を見付けて、此の土地の冬のよさを知らせ、その土地土地に應じて冬の惠みのあることを知らせることが大切であります。

冬ごもり……と御本にありますね。木や草が葉を落してジット春の來るのを待つてゐるのが冬ごもりです。

でも、草木の皆が冬ごもりをしてゐるわけではありません。淋しくなつた田や畑に、皆さんのやうに寒さに閉口垂れない麥が青いうねを作つてゐます。

麥ふめ、ほうい。

麥ふめ、ほうい。

「麥ふめ」は「ほうい」よりも強く、その間に一二秒おいて申しますれば抒情的であります。

麥は踏まれると、根が一層強くなるのです。

霜柱のために麥の根元の土が浮きあがり、根元が弱くなりますから、それを防ぐのが麥踏みであります。根が強いと、雪が降つても、霜がおりても、びくともしません。麥の根は人にすれば心です。心が強ければどんなことがあつてもびくともしません。麥でも踏まれて丈夫になる。まして日本人の心や身體は鍛えれば鍛える程どうでせう。

「丈夫になります」

「強くなります」

麥は根を丈夫にして、春が來るまでジット我慢します。強い底力を養ひながら、春の來るのを待ちます。時期の來るのをジット待つ。「この怺へて待つこと」を忍耐といひます。皆さん一緒に言つてみませう。

「忍耐」

ジットこらへて待つ。日本人はこの忍耐の力が強いのは、これは冬の季節が育ててくれたのです。冬のお蔭です。

日本の子ども。世界を導く日本の子どもは我慢強い子です。

世界を導く日本の子どもといふことを、折にふれて申すことが兒童の意氣を高め、自らの誇りを堅持させることになるのであります。

常日頃の懂かな言葉遣ひが如何に重要であるかを考へて、心せなければならぬのであります。

麥を踏むのは？

「子供です」

踏まれた麥が丈夫になるだけですか。

「いいえ、踏んでる子供も丈夫になります」

かうした點が亦大切な問答です。

「麥ふめ、ほうい」　「麥ふめ、ほうい」

寒さに負けない勇ましい子どもの聲が、北風に乘つて遠くまで響いて行きます。

さあ、それでは、そこまで讀んで下さい。

二三兒に讀ませてここで一區切りをつけます。

第二時には、いつものやうに全體を讀んでから入るのがよいと思ひます。

田舍の子が寒さに負けずに、麥を丈夫にし、自分の心も身體も丈夫にしてゐる所でしたね。

「麥ふめ、ほうい」　「麥ふめ、ほうい」

今度の御話は、

「山國や雪國や海べの子どもたちのことです」

雪の全然降らぬ地方では雪國の寫眞等を準備して、雪を征服してゐる地方を知らさねばなりません。

所によりますと、十月の終り頃から山はぼつぼつ白くなります。やがて十二月にもなりますと平地にもチラホラ雪が降り、やがてそれが十糎二十糎。所によつては一米も二米も。お二階から出入りするやうになる所もあります。

子供達は炬燵の中で寒がつてゐるのかと思ふと、どうでせう。

「スキーで學校に通ひます」

スキーは實に愉快です。冬の運動でこれほど愉快な運動はないさうです。

雪が降つて困つたなどとは申しません。

雪の上をスキーで馳け廻つて、どんな御用もお手傳もするのです。

雪など少しも恐れてゐません。それどころか、

「もつと降れもつと降れ僕。等は鍛える。負けないぞ」ととても元氣です。

その筈です。世界を導く日本の子どもが弱い筈はない。

雪國ばかりか海邊の子どもも元氣です。冷たいといつたら、海邊の風ほど冷たい風はありません。

海邊の風に吹かれて、磯の松がうねりくねつて、一層強くなるやうに、海べの子どもたちは寒い波風に鍛えられながら強くなつて行きます。

本當に、冬は何處にゐても、強くなるのによい季節です。ををしい心、男らしい心で暮らすのによい季節です。

寒い冬を少しも恐れない強い日本人。忍耐強くジツト我慢する日本人。

世界を導く日本の子どもは、冬は寒くて困りますか。

「いいえ」

どうです。寒がりやさんはゐないかな。

輕く笑ひながら級中全兒童の顏を見渡す必要があります。」

襟首を縮めてゐるはないかな。者

土地土地の事情によつて違ひますが、手袋・襟卷等にふれて冬を恐れぬ日常の實踐指導を行ひます。

かうして基本的な指導の後に、強くなるための實踐指導を行ひます。

(1) 就寢・起床の時刻を一定すること。

(2) 戸外運動につとめること。

(3) 父母のいひつけを守つて元氣に働くこと。

(4) 手・體・足をきれいにすること。

(5) 含嗽して風邪にかからぬやうにすること。

(6) どんなつらいことがあつても忍耐すること。

(7) 厚着をしない、手袋などはあまり用ひないこと。

これも一方的な先生の訓辭であつてはなりません。即ち、

この頃は何時頃に寢る？

何時頃に起きる？

といふやうに、輕い氣持で質問して、子供達にも素直に答へさせながら、「それや遲い」とか、「早い」とか判斷を與へ、「どうだな風邪をひかぬやうにするには、どんなことに氣をつけたらよいと思ふ？」といふ風に、問答によつて兒童から要點を生まれさすやうにして行くべきであります。

本文

十八　圓山應擧

應擧は、京都のぎをんの社に出かけて行つて、毎日、鷄の遊んでゐるやうすを見てゐました。じっと鷄ばかりみつめてゐるので、人はふしぎに思ひました。

一年ばかりたつてから、應擧は、鷄の繪をかいて、社にをさめました。

お參りに來た人たちは、

「よくかけてゐる。」

「まるで生きてゐるやうだ。」

といってほめました。

ある日、やさいを賣って歩くおぢいさんが通りかかってしばらく見てゐました。

「鷄はいいが、草があるのはをかしい。」

と、おぢいさんは、ひとりごとをいひました。

應擧は、そのことを聞いて、おぢいさんの家へたづねて行きました。

おぢいさんは、

「私など、繪のことは少しもわかりませんが、ただ、長い間、鷄を飼つてゐますので、羽の色つやが、きせつによつてちがふことを、ぞんじてをります。あの鷄の羽は、冬のやうですが、そばに夏の草がかきそへてあるので、ふしぎに思つたのでございます。しつれいなことを申しまして、まことにすみませんでした。」

といひました。應擧は、

「よいことを教へてくださつた。」

と、ていねいにお禮をいつてかへりました。

應擧はそののち、また鷄の繪をかいて、あのおぢいさんに見せました。おぢいさんは、すつかり感心しました。それよりも、自分のやうな者にでもよく聞いて繪をかかうとする應擧を、ほんたうにりつぱな人だと思ひました。

要旨

本課は、日本繪畫史上屈指の人物である圓山應擧の傳記　藉りて、應擧が勵精細心寫生につとめたことから、兒童の奮起を求め、藝能科其の他の授業に直接役立たしめんとするものであります。

取扱の中心

本課を取扱ふに當つて、教材のどこに重點を置いたらよいでせうか。教師用書に據れば、本課に於て指導すべき主要事項は、

○一、應擧が毎日祇園の社へ行つて、鷄の遊んでゐる樣子をみつめ、實物の寫生に苦心したこと。

○二、祇園の社にをさめられた應擧のかいた鷄の繪がたいそう評判になつた時、應擧はそれに滿足してしまはなかつたこと。

○三、野菜賣りのおぢいさんに批評されたのを感謝して、更に努力したこと。

四、改めて描いたものをそのおぢいさんに見せて教を乞ふたこと。

五、なにごとをするのにも自分の氣がすむまで忠實にこれをなしとげること。

六、なまけず、辛抱づよく仕事に勵んで新しいものをつくり出すやうにすること。

七、左記の諸項について諭すこと。

(1)　人から忠告をうけたときは、喜んでこれを聽くこと。

(2)　疑を質すことを恥ぢてはならないこと。

(3)　人が見ないところでも自分の仕事を怠つてはならないこと。

(4) 仕事を仕上げたのちにも、思はぬ遺漏がありはしないかをよく檢討してみること。

(5) 成績品を大切に保存して、ときどきそれをかへりみること。

以上でありますが、○印をつけた條項に說話の中心をおいて指導すべきだと思ひます。さうして何事にも熱心でなければならぬと共に、謙讓でなければならない。かやうな態度であつてこそ始めて優れた人になることができる。何事をなすにも自分の力いつぱいに働いてその仕事に忠實でなければならぬといふところに重點をおくべきでせう。

又「それよりも自分のやうな者にでもよく聞いて繪を描かうとする應擧を、ほんたうに立派な人だと思ひました」は最後の重點をおくべきところです。

取扱上の注意

一、應擧の秀でた點は諸家の筆意を參酌したところにあるのではなく、模倣を脱して直ちに天然造化を師として寫生を重視するところにあつたのであります。しかもその描畫は決して死物の影寫ではなく、鳥獸の活動する態度を見失はないやうひたむきに努力したのであります。その寫生に苦心したことについては幾つかの傳說が人口に膾炙してをります。臥猪の寫生の如きはその一例であります。それらの傳說はいづれも應擧の精進努力を物語るものでありますから、それを一通り辨へた上で指導に當られることが必要であります。しかし無用な傳說物語に墮したり、又應擧の事歷を細かに說話したりする事はさけねばなりません。

二、本教材の取扱については、教師が工夫をこらすとこらさぬとでは、その差が著しく生じます。取扱者の研究心が旺盛でありますと、ぐんと伸びて感じられる教材でありますから、研究教授の材料としては好適なものであります。

本教材の如く、心理描寫の必要な說話の仕方には大いに研究を要します。殊に謙讓さがよく現はれる動作・言語・對話の仕方を、よほど研究いたさねばなりません。こんな教材でみつちり研究しますと、說話の要領をつかむことが上手になります。その方法については取扱の實際に詳述して置きますから御研究下さい。

三、本教材は精勵忠實の教材であると同時に、人の意見を入れよと云ふことも一つの主眼となるものと思はれます。自信はもたねばならぬが、それを、固持したり自惚たりしてはならぬこと、人の意見は尊重し充分檢討して自己の物となすべきことにも觸れねばなりません。

時間配當

三時間。

準備

掛圖（後期用第十五・十六圖）

取扱の實際

今日は「十八圓山應擧」のところですね。靜かに讀んでみませう。

靜讀を終つた者には机上に本を置かせ、どんな内容であつたかを默想させます。

どんな御話ですか。

「圓山應擧といふ人が鷄の繪をかいてお宮に奉納（まつり）ると、野菜賣りのおぢいさんが見て、鷄はいいが草がおかしいといつたのを聞いて、そのおぢいさんをたづねて敎はつて立派な繪を描いたお話です」

この課の大意の把捉は比較的樂であります。國語科の指導とまつて、このやうな課で大意の把捉の練習を重ねるべきであります。

圓山應擧……繪描（ゑか）きさんですね。

今から百五十年ほど前の人で有名な繪描きさんでした。

京都に住んでゐました。その頃の京都は、天子樣がゐらつしやつた都でした。應擧が鷄の繪を奉納したのは今の八坂神社です。この社は祇園（ぎをん）といふ地名の所にあるので祇園の社といはれてゐました。

神の國日本では昔から神樣に色色なものを奉納する風習があります。

それは、眞心こめて書いたお習字を奉納したり、馬を描いた繪を奉納したり、刀や弓などをさし上げるのです。そんなのを見たことがあるでせう。

「あります。八幡樣にあります。

大抵の村の神樣にはあるものですから、それを兒童に氣付かせます。或は又、學校によつては、村の祭などに、書や書方や手工などを奉納してゐるのもあります。

八坂神社……祇園のお社に飼はれてゐる鷄をじつと見つめてゐる人があります。

一日だけではありません。二日も三日もです。

「また來てゐるよ、あの人は……ネ、一寸。どうかしてるんぢやないかな。鷄ばかりおつかけて、鷄ばかり見てゐるんですよ」

茶店の婆さんは氣狂ひかなと思ひました。

「この忙がしい時に……なんてまあ、ひまな人もあるもんぢや……それにしても、よくもまあ、あきずに鷄ばつかり見てゐられるものぢや」

と、よくお詣りに來るおぢいさんもつぶやきました。

何時の間にかこれがお詣りする人の噂にまでなつて仕舞つた程です。

「變つた人もあるもんぢや。ほんにまあ、朝から晩まで鷄ばかり相手にしてゐるんですから」

何と言はれやうと、應擧は氣もつきません。人がどう思はうが、自分の氣の濟むまで鷄を見ては寫生してゐました。

「何とかして生きてるままのを、そのまま描いて見たいものだ」と思つてゐる應擧の日日は鷄のことでどんなだつたらう。

「頭の中は鷄のことでいつぱいでした」

「朝から晩まで鷄のことを、考へてばかりゐました」

とうとう應擧は、生きてるままの鷄の姿をはつきりとつかむことが出來ました。

雄鷄の時をつくる時の樣子も眼の中にはつきり寫りました。

母鷄がヒヨコに飼をやるところを見つめては寫生に夢中だつたのですから、人人に不思議がられるのは無理もありません。

一年ばかり經つた時のことです。

「よく描けてゐるね」

「まるで生きてるやうだ」

「羽の色といひ足の爪のところといひ、素晴らしい繪だ」

たいへんな評判です。

それが京都中の大評判。お社にお詣りに來た人達でほめない人は誰一人ありません。

茶店の婆さんも、その繪があの氣狂ひかと思つてゐた人の描いたものであることに、始めて氣がつきました。

「やつぱり偉い人は違ふものぢや……氣狂ひかと思つたところが氣狂ひどころか偉い御方ぢや……一年もかかつて描いた鷄ぢやもの美事な筈ぢや」

どうです皆さん。鷄の繪を毎日毎日がいてゐたのですよ。それをどう思ひます。

「隨分辛抱强いと思ひます」

「よくまああきないと思ひます」

「まじめな人だと思ひます」

等の回答を發表させて、それをまとめ上げます。さうしてそれらを板書します。

偉い人は皆辛抱强い人です。昔から名を擧げた人は皆、應擧のやうに辛抱强くまじめに一生懸命やつた人です。

でも、ほめられるといい氣になる人もありますが、應擧は少しも自慢しません。

それどころか、此の繪について何か注意してくれる人はないかと思つてゐたのです。

或日のこと、野菜を賣り歩くおぢいさんが通りかかつて、暫らく見てゐました。

鷄はいいが……どうも描いてある草がおかしい」

と獨言（ひとりごと）を言ひました。

これを聞いて、應擧は、

「草がおかしい？」（一寸首をかしげます）

考へても考へても、さつぱり判りません。

「この草の何處がおかしいのだらう」（一寸首をかしげます）

いくら考へても判りません。

どうだらう。判らないことをそのままにして置いたのでは？

「いけません」

「いつまでたつてもわかりません」

「判らないことをその儘にしてゐてはいけない。それについて聞くことは一寸恥づかしいやうだが決して恥づかしいことではない。さうだ、解らないことを其の儘にしてゐてはいけない」

「さうだ、あのおぢいさんに聞いてみやう」

ここの取扱が大切です。訓戒をあたへるやうな調子で「皆さん、解らないことをそのままにしてゐてはいけませんよ。恥づかしいかも知れませんが、思ひ切つて訊くのです」と云ふよりも、應擧の獨言のやうにいふた方が、効果的なのです。兒童の受ける感銘の度は、この方が遙かに強いのであります。

「草がおかしいとおつしやられましたが、それについてどう考へても解りません。氣にかかつて氣にかかつてなりませんのです。どうぞ御教へ下さいませんか」

應擧の熱心さ眞劍さ細心さ……その上に、更に完璧を期する態度を、この禮儀正しい言葉の中に了觀させねばなりません。

「いや、これは恐れ入りました。私は繪のことはさつぱり存じませんから、お教へするなど……とんでもないことです。

たづねる方も禮儀正しければ、又問はれた方の老人も謙遜なのですから、この對話の中に、物のたづね方の指導、問はれた時の指導が含まれてゐるのであります。教師の對話の研究は、必ずただ對話だけでなしに、さうした點にまでも氣をくばらねばなりません。

「ただ私は長い間鷄を飼つてゐますので、鷄の羽の色つやが夏と冬とでは違ふことを存じてをります。あの、お描きになられた鷄の羽色は冬のやうですが、そばに描き添へてある草が夏の草なので

そこを不思議に思つたのです。繪の判らぬ者がこんなことを申して失禮いたしました」と言ひました。

應擧も思はずハツト思ひました。どうしてでせう。

「鷄のことばかり夢中になつてゐたので、草のことには氣づかなかつたのです」さうです。

「鷄のことばかり氣にしてゐて、草の方はうつかりしてゐました。本當によいことを敎へて戴きまして有り難う御座いました」

丁寧に御禮をいつて歸りました。

暫らくたつて、又鷄の繪を描いて、あのおぢいさんに見せました。

「如何でせう。おぢいさん、この繪では」

熱心に敎を乞ふ應擧の樣子に氣をつけねばなりません。

おぢいさんはすつかり感心しました。

このおぢいさんの感心は二つにかかつてゐる方がよいと思ひます。繪を見て感心したのと、自分のやうな者にでも、よく聞いて立派な繪を描かうとする應擧を立派な人だと感心したのとです。

流石に日本一とまで云はれるお方だけある。私のやうな者にまで、ああして禮儀正しくして敎はりに來る熱心さ。少しも威張らないあの御挨拶。

これ程の心掛けなればこそ、これ程の繪もお出來になるのだ。……ああ立派なお心のお方だ。さうだ。こんな立派な繪の御出來になるのも、お心掛けが立派だからだ。

立派な心から立派な物が生まれる。心が立派でなければならない。

「心だ心だ、立派な心だ」

と、おぢいさんは本當に感心してしまひました。

說話は大體以上でありますが、整理の時には、先づ應擧のどこがよかつたかについて感想を發表させます。

圓山應擧はいつ頃の人でしたか。

「百五十年程前の繪師（ゑかき）です」

應擧のお話で、應擧はどんな性質の人だと思ひますか。

「熱心な人だと思ひます」

「辛抱强い人だと思ひます」

「禮儀の正しい人だと思ひます」

「人のお話をよく聞く人だと思ひます」

等、兒童の發表に應じて、例へば「人のお話をよく聞く人だと思ひます」については、「人から忠告をうけ

た時は、喜んでそれを聽き入れる人は偉い人ですね」と申します。これを「忠告をうけた時は喜んで聽かなければなりまん」と云つたのでは駄目なのです。勿論それも時と場合とに應じなければなりません。かかる訓戒の與へ方には十分なる研究を要します。

かうして整理の段では、兒童の感激發表に合せて、

何事をするにも、自分の氣のすむまで忠實にこれをなしとげること。

なまけず辛抱づよく仕事に勵んで新しいものを造りだすやうにすること。

人から忠告をうけた時は、喜んでこれを聽くこと。

疑を質すことを恥ぢてはならないこと。

成績品を大切に保存すること。時々それをみること。

等について指導します。」

十九　負けじだましひ

本文

板垣退助は、小さい時から負けぎらひでした。

すまふがすきで、仲よしの後藤象二郎とよくすまふをとつて遊びました。

象二郎が強いので、何度とつてもかなひません。けれども、退助は、投げられても、倒されても、起きあがるとすぐ、

「もう一度やつてくれ。」

といつてとびかかつて行きました。

退助があまりこんきよいので、しまひには、象二郎の方で、

「わたしが負けた。わたしが負けた。」

といつて、退助の負けぎらひなのに感心しました。

☆

後藤新平は、まづしい家に生まれたので、子どものころは、いつもつぎのあた

った着物を着てゐました。けれども、新平は、平氣で學校へ通ひました。夜は、眠くなるのをふせぐために、てんじゃうからなはをつるして、それでからだをしばって、勉强をつづけました。

☆

大山巖が、若い時のことでした。イギリスの軍艦が、鹿兒島へせめ寄せて來たことがあります。

海と陸とで、はげしく大砲をうちあひましたが、なかなか勝ち負けがつきません。

これを見た元氣な巖は、いきなり着物をぬぎすて刀をせおって、敵艦めがけて、勢よく泳いで行きました。敵軍は、この勇ましい姿を見て、びっくりしました。

要旨

本課は、兒童と時代の近い偉人板垣退助・後藤新平・大山巖らの負けじ魂を叙して、その三者の精神を集成して統一的に、己れが正しいと信じ、誠と信じ、職責と信じたことには、反對者が千萬人といへどもわれ往かんの氣象を長養する所に狙ひがあります。

取扱の中心

本課を取扱ふに當つて、教材のどこに重點を置いたらよいでせうか。教師用書に據れば、本教材に於いて指導すべき主要事項は、

一、板垣退助が後藤象二郎とすまふをとつて、勝つまでこんきよく續けたこと。
二、後藤新平が眠くなるのをこらへて勉强を續けたこと。
三、大山巖が刀をせおつて、敵艦にひとりで向かつて行つて、敵兵の膽をつぶさせたこと。
○四、國の爲に働いた人は、みんな負けじ魂を持つてゐたこと。
○五、なにごとにも必ず勝つといふ信念をもつて行ふやうにすること。
○六、粗暴にながれず、眞の勇氣を養ふこと。
七、次の事項について論すこと。
(1) 一旦やり始めたことは必ずやり通すこと。
(2) 成績の惡い科目は一段と努力をすること。
(3) 惡いくせのある者は、それを直すやうにつとめること。

以上でありますが、教材は三篇に分れてをりまして、各篇ごとに其の中心が違つてをります。この各々違つた中心を一まとめにすれば○印の條項となるのであります。

どんなところに各篇の負けじ魂の差があるかを見出して、一つ一つの徹底を期すると共に、各篇共通と考へられるものにまとめあげなければ、本課指導の目的は達せられません。今までにこんな教材ははじめてであるだけに面白く感ぜられます。

しからば第一の板垣退助の負けじ魂は、根氣强さと勝つまでやる敢闘の精神とが中心であります。第二は後藤新平の我慢强さと完成せずば止まぬ精神が中心であります。第三は大山巖の擊ちてし止まぬの氣魄、勝たずば斷じて己むべからずの必勝の信念を中心にしてあります。

見方によつては、第三は勝ち負けなどは考へない、ただもう止むに止まれぬ火のやうな心のほとばしりとも見られるのであります。勿論この精神が必勝の精神なのであります。

最後に、この三つを統一して單純化した場合に、どういふ點に指導の中心を置くべきであるか。本書に於ては、之を眞の勇氣に歸したいのであります。しからば眞の勇氣とは何か。皇國民としての立場から、己れの正しいと信じたことに向かつて、千萬人の反對者がありともわれ往かんといふ意氣こそ眞の勇氣であり、これに刄向ふものを破る心が負けじ魂であると思ひます。即ち天壤無窮の皇運を扶翼する臣民の本分に於て、敢てなすの精神と斷ずるのであります。私利私欲を滿たさんがためのものであつては眞の勇氣ではないことは勿論であります。

取扱上の注意

一、負けじ魂とは負け惜しみではありません。競爭に勝つことのみを求める心でもありません。皇國民としてなすべき事に於て、正しいと信じた時、誠なりと信じた時、それに向つて敢闘して行く精神であつて、それが私利私欲を滿たさんが爲であつてはならぬのであります。この魂こそは皇國二千六百有餘年の光輝ある歴史を形成したものであります。

兒童の中には、往々お山の大將氣取りで、何をやつても負けたくない者がをりますから、この點を十分理解し得るやう取扱はねばなりません。

二、「信は力なり。みづから信じ毅然として戰ふ者常によく勝者なり」

「勝敗は皇國の隆替に關す。光輝ある軍の歴史に鑑み、百戰百勝の傳統に對する己れの責務を銘肝し、勝たずば斷じて己むべからず」と戰陣訓に示された「必勝の信念」は千磨必死の訓練によつてのみ生まれることは、大東亞戰爭の一つ一つが證明して居ります。

本課の指導と相俟つて、必ず勝てるといふ力を養ふやうに、體錬科に於て集團的個人的な競技や武道等に力を注がねばなりません。

三、本課の意圖するものは題目の究明ではありません。又、三人の傳記に深入することでもありま

せん。三人個々の話の中に、自ら現はれてゐる盛んな氣魄を感得させることにあります。之を感得した兒童は、この精神が日常生活の一つ一つに具現される所まで行かねばなりません。說話に一段の工夫の必要も亦ここにあるわけです。

四、大都市の兒童の住宅地區にある者には、生活の環境から敢鬪の精神の乏しい風があります。さうした環境の學校では、特に地域的特性を考慮されて本課の如きに最も力點をおかねばなりません。

時間配當

四時間。

準備

後期用（第十七・十八・十九圖）

取扱の實際

今日は「十九　負けじ魂」

負けじ魂つて、どんなことだらう。

「負けたくない心です」

「負けない心です」

「なんでもやつたら勝つ心です」

さあ一つ、いつものやうに靜かに讀んでみませう。今日のは三つに分れてゐますが、三つとも讀みませう。

靜かに讀ませ、讀み終つた者にはどんな內容であつたかを默想させます。

どんな方の御話ですか。

「板垣退助・後藤象二郎・後藤新平・大山巖といふ人の子どもの頃の事が書いてあります」

どんな內容であつたかは、細々と語らせる必要はありません。出てくる人の名を聞く程度で結構です。

板垣退助と後藤象二郎ですね。それから、

後藤新平。

大山巖。

と、兒童の回答につれて板書します。板書の時には兒童の回答を隙なく結びつける工夫が必要です。板書は輕々しく取扱つてはなりません。どんなことを板書し、どんなことにそれを結びつけるかは、豫め考へておかねばなりません。板書の時機、板書の語句、生かすべき、結ぶべき事柄、等に注意すべきであります。研

究教授の際などでも、教材そのものの研究は十分でも、かうした教材をより効果的にする技術方面の研究が足りないために、折角の授業が引立たないことはしばしば見聞することです。

これらの人は（板書を見ながら）どんなことで天皇陛下にお仕へし、お國につくしたか知つてゐますか

兒童は大部分知つてをりません。中には細かい點までも知つてゐる子もありませうが、飽きながら聞き流す程度に取扱ひ、次の程度で一括してまとめます。

明治天皇に御仕へした方々で、一身を捧げて御國につくした立派な人です。

第一のところだけをも一度讀んで下さい。

○○君讀んで下さい。

板垣退助は小さい時、誰と仲がよかつたかね。

「後藤象二郎です」

退助はどんな風でした。

「小さい時から負けぎらひでした」

好きな遊びがありましたね。

「角力がすきで、仲よしの後藤象二郎とよく角力をとつて遊びました」

ところが強いのは？。

「象二郎が強いので、何度かかつて行つても退助が負けます」

象二郎が強いので、何度かかつて行つても、スッテン　コロリン。

ところが退助は？。

「負けぎらひですから、倒されても倒されてもかかりました」

負けぎらひの退助は、倒されるともうむつくり起き上がり、

「も一度やらう」

「も一度、よし、さあこい」

二人はまたも四つに組みましたが、やがて退助は、スッテン　コロリン。

「スッテンコロリンと倒れて仕舞ひました」といつたのではこの話が死んで仕舞ふのです。スッテンコロリンで、倒されたことは了解します。說話の上手下手はこんなところに現はれるのです。

「も一度やらう」

「よし、さあこい」

スッテン　コロリン。

「も一度やらう」

「よし、さあこい」

スッテン　コロリン。

「さあこい」の次に一二秒おいて「スッテンコロリン」を輕く言ひます。これは三度以上繰り返してはいけません。これが多過ぎますと授業がくづれます。

何度かかつても、スッテンコロリン。

然し退助はどうでしたか。

「幾度でもかかつて行きます」

負けても負けても「なにを」（强くいひます）と飛びかかります。額からは汗が瀧のやうです。息もはづんでハアハアいひながら飛びかかります。顏も眞赤、目も眞赤。

もう足も腰もフラフラです。

それでもかかつて行くのです。

「なあ……なあにを……ま……まけるもんか……ええ」（最後を强く）

斷續的に申しますれば、疲れ切つても尙、勝たずんばやまずの意氣が現はれます。

相手の象二郎はどう思つたでせう。

「退助の負けぎらひにあきれました」

「退助の負けぎらひに感心しました」

退助があまり根氣がよいので、流石の象二郎も、

「わたしが負けた。わたしが負けた」といつて退助の負けぎらひなのに感心しました。

「退助は偉い者になるぞ。あの負けじ魂で仕事をしたら、屹度立派な人になるにちがひがない。昔からお國につくした人はみんな負けじ魂の人だつたから退助もきつと偉い人になるぞ」

「よし僕も退助君を御手本にしやう」

と象二郎は思ひました。

皆さん。角力に勝つたのは、象二郎ですか退助ですか。

この期の兒童には一寸むづかしい質問ですが、この質問に答へられたら授業は成功です。この質問で本課の取扱が始めて生きるのであります。

負けぎらひの退助は立派な人になり、お國につくしましたが、退助にならつた象二郎も亦立派な働きをいたしました。

主要な指導要項は、退助の話の中に織り込みました。「お國のために働いた人は皆負けじ魂をもつてゐた人です」と、平面的に取扱つたのでは兒童の受ける感銘は少ないのです。訓辭とか訓戒とかは眞正面にやらずに、かうした方法をとられるやう工夫をのぞみます。

象二郎は、退助のどんな所に感心しました。

「負けぎらひで根氣のよいのに感心しました」

二人の仲がよいと思はれるところはどこですか。

象二郎は自分はもう角力に飽きてゐながらも、相手退助の氣の濟むまで、一緒に遊んでやつてゐること、及び「わたしがまけだ」といふあたりに仲の良さが出てゐることに氣づかせ、少し位の無理は友達のためにすろ、寛容な象二郎の態度をほめあげ、友達の仲について論して終ります。

ここらで第一時が終りませう。

第二時の後藤新平の取扱に際しては、前項の復習からいたしてを指導に入ります。

今日は第二のところを讀みませう。

誰の御話ですか。

「後藤新平の御話です」

後藤新平も明治天皇の御代にお國につくした人です。

どんな家に生まれましたか？。

「貧しい家に生まれましたので、いつもつぎのあたつた着物を着てゐました」

つぎだらけの着物でしたが、新平はどうでしたか。

「平氣で學校へ通ひました」

新平は氣にもかけません。

「繼ぎだらけだらうと、なんだらうと、お母様が丹誠になつた着物。贅澤をいつては相濟まない。着物は風邪さへひかなければいいのだ。

なんの、着物がよいからとて人間は偉くなるのぢやない」

着物のことなど少しも氣にとめません。

「お國のお役に立つ人になりたい。勉強だ勉強だ。心を鍛へ身體を鍛へて、お國に役立つ人になるのだ」

かうして學校へ通つて一心に勉強しました。

着物に對して無頓着であることの中に、母への孝の現はれを含ませば、更に人物にゆかしさが加はります。

ただ單に無頓着であつたと說くのみよりは、兒童への感じ方は大きな差があると思ひます。

勉強のいひ方にしても、ただ偉くなりたい、立派な人間になると云ふたのでは間違ひやすいのであります。

勉強の目的は、誰にも負けたくない、偉くなりたいといふ個人的の目的であつてはならない。……お國の役に立つ人になるための勉強なのであります。些細のことですが、こんな所がむづかしい所です。

ですから勉強も一生懸命。

今日はここまでと、毎日豫定をたてました。たてた豫定どほりが出來なければ寢床に入りません。

本教材の第一項の板垣退助の話は、負けぎらひとはつきり出てゐますが、第二項ではそれが出てゐません。天井から繩をつるして勉強しただけでは、勉學といふ方になり、負けじ魂と說くのは不適當であります。そこで本書では、一日の勉學に豫定を立て、その豫定に打ち勝つたと工夫したのであります。

豫定通り出來ないのは、勉強に負けたのだ。自分の心で約束した事でも約束は破つてはいけない。負けるものか。今日の豫定はがんばつてやり通すぞ。

でも時には（コクリコクリと居眠りにうつる動作をします）

「ハツ……さうだ……これは僕の負けだ。よし眠るもんか」

でも眠くなることもあります。

負けまい、負けまい。勉強に負けまい。

きめたところまでやり拔くぞ。

「面白いでせう。とうとう眠くなるのを妨ぐために、天井から繩をつるして、それで身體をしばつて、

「きめたところまで、やり拔くぞ」

「きめたところまで、やり拔くぞ」

と、やり終るまでがんばり通しました。

やり拔くまでがんばり通すのも負けじ魂です。

此の前に象二郎が「お國につくした人は皆負けじ魂を持つてゐた人だ」といつたことを覺えてゐますか。

新平のがんばり、やり拔くまでは止めない負けじ魂が、新平を御國に役立つ立派な人にさせたのです。

新平は貧乏な家に生まれて、つぎだらけの着物を着て、恥づかしいと思ひましたか。

「思ひません」

「氣にもかけません」

貧乏を恥づかしいと思はないのです。

さうすると、新平の心は貧乏だつたのでせうか、貧乏ではなかつたのでせうか。

「貧乏ではありません」

貧乏のことばかり心配したり、着物のつぎはぎを氣にしたりするやうでは、立派な人になれませうか。

「なれません」

新平は貧乏に打勝ちました。着物にも勝ちました。さうして一番眞劍な勉強にも勝ち拔きました。

負けじ魂で進めば、出來ないことは何もありません。

新平のお話と退助のお話とは、どこが同じでせうか。

二人の話について感想を發表させ、それを批判させて必勝の氣魄にふれて行きます。

今度の御話は大山巖の御話です。讀んで下さい。

「〇〇君」

大山巖も板垣退助や後藤新平と同じ頃、大きな功績をたてた人です。此の方は日露戰爭の時の陸軍總司令官になられた方です。

巖の生まれた頃は、日本をうまく騙（だま）してやらうと思つてゐた國が幾つもありました。アメリカ・イギリス・フランス等の國々です。

神國日本が騙されるものですか。

よし、それならおどかしてやらうと、巖の故郷の鹿兒島へイギリスの軍艦が攻め寄せて來ました。

やがて激しい戰が開かれました。軍艦から大砲をドンと擊てば、日本の方も負けてはゐません。大砲をドンと擊ち返します。

なかなか勝ち負けがつきません。

「あ！誰だ、あれは」（伸びあがつて前方を驚きながら指さして注視します）

兒童の注意はこの突然の動作にひきつけられます。

刀を背負つた少年が前方の敵を睨みつけながら泳いで行くのです。

「大山だ」

「大山巖だ」

大きな大砲を乘せてゐる軍艦に泳ぎついて、斬込んで行かうといふのです。

敵の方でも呆れてびつくりして仕舞ひました。

大山巖と軍艦とが戰つたら、どちらが勝つと思ひますか。

「軍艦が勝つと思ひます」

負けるのに、巖はどうして泳いで行つたのでせう。

「くやしかつたから」

巖は勝つとか負けるとか考へたでせうか。

「考へません」

日本の人の勇ましさに驚いて仕舞つた敵は、大急ぎで鹿兒島から逃げ去りました。

敵の軍艦は日本人の心に驚いて逃げたのです。大きな軍艦ですもの、人間の一人や二人では逃げもしないでせうが、それが逃げたのは、日本人の誰もが持つてる「擊ちてし止まむ」の強い心にすつ

かり驚いたからなのです。

この課に三つのお話がありましたが、三人とも同じやうに持つてゐた心はなんでせうか。

「負けじ魂です」

負けじ魂とはどんな魂ですか。

「最後までやり通す心です」

「勝つまではやめない心です」

「敵をたほさずばやまない心です」

等々によつて三つの話を統一して板書して行きます。

このやうな負けじ魂は、此の三人だけが持つてゐるものですか。

「いいえ、僕達も持つてゐます」

さうです。日本人の心の中には誰でもが、お國の大事には生命をなげ出して居りますが、それは皆負けじ魂の現はれです。

今、日本は大東亞戰爭をしてゐます。日本の軍人が世界一強いことはなぜでせう。

「負けじ魂を持つてゐるからです」

三人ばかりでなく、日本人は誰もが負けじ魂を持つてゐます。でもそれは、訓練、ねりあげ鍛へ上げれば上げる程、強くなるのです。

日本の軍人の強さは、皆この訓練のお蔭です。海軍魂・飛行家魂・落下傘魂、皆この訓練のお蔭です。

日本人の誰もが持つてゐるこの負けじ魂で、二千六百餘年も日本を守り續けて來たのです。日本がこれから世界を導いて行くには　幾度ももつともつと大きな困難があるでせうが、それに打ち勝つ強い心、負けじ魂を錬り鍛えて、お國につくし、天皇陛下にお仕へいたさねばなりません。

二十　皇后陛下

本文

皇后陛下は、たいそうおなさけ深く、國民をよくおいつくしみになります。

お小さい時から、たいそうおきまりよく、ごしっそにおくらしになりました。

おもちひになるものは、いつもだいじにお取りあつかひになり、そのせいとんも、ごじしんでなさいました。

關東に大ぢしんがあったときには、たくさんの着物をおぬひになって、困ってゐる者にお惠みになりました。

滿洲事變には、戰地の寒さをお思ひになって、軍人たちにまわたをたまはりました。戰場で、きずを受けた人たちに、ごじしんでお作りになった、はうたいをたまはりました。

支那事變が起ってからは、いくたびとなく、陸海軍の病院へお出ましになって白衣の勇士をおなぐさめになりました。お庭にできた草花などを、おつかはしになったこともあります。また、戰地にある軍人のために、わざわざおあみになった、えりまきをたまはったこともあります。

私どもは、日本國民として、皇后陛下の御惠みを、しみじみと、ありがたく感じるものであります。

要旨

皇后陛下御誕生日に近いころを選んで、陛下の御仁慈の數々を知らしめ、天皇陛下の大御心のままに御心を用ひさせられる御德の高さを仰がしめ、聖恩にこたへ奉るの念を強うするところに趣旨があります。

取扱の中心

本課を取扱ふに當つて、教材のどこに重點を置いたらよいでせうか。教師用書に據れば、本教材に於いて指導すべき主要事項は、

一、皇后陛下の御略歴。

二、皇后陛下は國民を深くおいつくしみになられること。

三、皇后陛下は御幼少の時よりおきまりよく、御質素であらせられたこと。

四、皇后陛下は御自身でお作りになつたものをたびたび國民に御惠みあそばされたこと。

五、常に天皇陛下・皇后陛下の御惠みに國民はありがたく感謝申し上げて、其の萬分の一にも報ひ奉るやう心がくべきこと。

以上でありますが、本課の如きはどこに重點をおくといふことなく取扱はねばなりません。强いて重點を求めるならば、皇后陛下の御仁慈にわたらせられ給ふ御事であります。かうした教材は、畏れ多いことのために抽象的になり易いのであります。

感泣さすべきことも、なし得ずに終る恐れがあります。教師としては謹話中にも御仁慈のほどに感銘させるやうに、愼重に取扱はねばなりません。

取扱上の注意

一、本課の取扱に際しては、教師は服裝・態度・敬禮等に注意し、しかも平易に謹話いたさねばなりません。又、兒童の態度言語等について、皇室に對し奉る禮法の指導もいたさねばなりません。

なほ皇后陛下の御幼時からの御日常の御美德は、仰ぎ奉るところであるとともに、また兒童をして自ら內に深く省み、襟を正すべきことが多い點に留意しなければなりません。

二、皇后陛下の御近狀については勿論ですが、行啓あらせられた地方では、其の時の御事について申し述べることによつて、本課指導の第一とせねばなりません。

三、新聞雜誌等に掲げられた皇室に關する御寫眞は、不敬にならぬやうにする注意を與へることは勿論ですが、具體的にはどうしたらよいかの指導と共に、學級別に御寫眞奉納袋を用意して、不敬になる恐れのあるものは、切りとつて集め、適當な時に學校全體のものを處置することも方法であります。

配當時間

三時間。

準備

掛圖（後期用第二十圖）

宮城の御寫眞。

取扱の實際

三月六日はどんな日か御存じですか。

「地久節です」

地久節と申しますと。

「皇后陛下の御生まれ遊ばされた日であります」

さうです。皇后陛下の御誕生日で、國民が擧つて御祝ひをいたします」

天長節は。

「天皇陛下の御生まれ遊ばされた日であります。

天長節は天皇陛下、地久節は皇后陛下の御生まれ遊ばされた日であります」

今年も皆さんと共に、益々榮え給ふ皇室の御芽出度い日をお祝ひいたしませう。

皆さんは一月一日にも又、二月十一日の紀元節にも學校の式場で、眞中の天皇陛下、御右の皇后陛下の御寫眞を拜して、校長先生はじめ皆が一緒に天皇陛下の萬歳をお祝ひいたしましたね。

神の國日本は、神樣の御血筋の天皇陛下が、私達國民を御可愛がり下さいまして、私達國民がしあはせになるやうにと、いつも神樣にお祈り下さいます。

國民のしあはせを御心配して下さいます皇室を戴いてゐる私達の幸福は、とても筆や言葉では申しつくされません。

皇后陛下は明治三十六年三月六日に久邇宮邦彥王第一王女として御誕生遊ばされ、大正十三年一月二十六日に皇太子妃に立たせられ、昭和元年十二月二十五日皇后となられました。

「二十皇后陛下」のところを讀んで下さい。

二三兒に拜讀させます。

天皇陛下・皇后陛下・皇太子殿下その他、皇室のことについての御話は謹んでお話もいたしますし又皆さんの方も謹んで拜聽いたしませう。

言葉遣ひも一番丁寧にいたしませう。

皇后陛下は大層お情深く、私達國民をお慈しみ下さいます。

有り難い極みであります。

御幼少時から、大層おきまりよくあらせられました。

御用ひになるものは、筆や鉛筆や紙入れなどでも、御使用が出來なくなるまで御用ひになられました。皆さんはどうでせうね。皇后陛下を御手本に仰いで大事に使ひませうね。

御用ひになるものも、きちんと御自身で御整理遊ばされました。お側付の女中さんがゐるのですがそれでも御自身でお出來になることは、決して女中さんまかせに遊ばされず、御自身で何事もなさいました。

陛下は學習院女學部に御在學遊ばされましたが、大正七年からは御邸で御勉强遊ばされました。

陛下は御兩親殿下には優しくお仕へになり、御兄弟の方々とは睦まじくおすごしになりながら、毎日規律正しく御勉强なさいました。

いつも午前六時にはお起きになり、御庭に御まつりしてある神樣に御參拜になり、八時には朝の御食事を、九時から御勉强です。

夜もきまつて十時には御休みになられました。此のご日課はきちんとお守りなされて、少しもお違ひになるやうなことは有りませんでした。

皆さん皇后陛下のこの規律正しい御日常を御手本と仰がねばなりません。

大正十二年。今から二十年程前のことですが、關東……東京や横濱に大地震があつて、それがもとで大火事になつて、東京も横濱も、もうこれでは立ちゆくまいと思はれるほどに、滅茶々々になりました。死んだ人も澤山あり、怪我をした者も幾らあるか知れません。燒け出されて家のない者、着物のない者、食物のない者、父と子は分れ、母を失つた子供達だけでも大變な數でした。

此の時、陛下は新潟縣の赤倉に滯在中であらせられましたが、東京のやうすをお聞きになると直ぐ近くの吳服屋さんから澤山の着物の材料をお取り寄せになり、御みづから針を運んで着物をお縫ひになりました。さうして出來上がつた着物は皆、なんぎな人にお頒けになりましたので、これを戴いた人々は、

「勿體ない。尊い御身であらせながら、ご自身で御ぬひ下さいました着物を下さいまして、有り難う御座いました」とおし頂いて拜みました。

間もなく東京に御歸りになりましたが、その後もお側の女中さんを御相手に、多くの着物をおつくり下さいまして、方々に御頒け下さいました。

そればかりか、日本赤十字社病院に御出になり、怪我をした人々をお慰めになり、バラックに住む人達には「さぞ寒いことでせう」とお情け深い御言葉をたまはるなど、可哀相な人達をおあはれみ下さつたことは數へきれない程であります。

皇后陛下におなり遊ばされてからも、陛下の御惠みはいつも氣の毒な人達の上に注がせられ、哀れな身の上の者に御心を御つかひ下さいました。

「可哀相な者を助けよ」とは日本赤十字社へお出になる度に仰せになられた御言葉であります。御出になる度に、

「可哀相な者を助けよ」

これが私達日本人の上に立たせ給ふ皇后陛下の御心であります。思ふだに、胸がふさがる尊いお言葉ではありませんか。

昭和六年、滿洲事變が起つてからは、戰ふ軍人の上を深く思ひやらせ給ひ、「御國のために働いて

ゐる軍人に對して、寒い滿洲のことだから、よくよく身體に氣をつけよ」と仰せられ、有り難いことには暖い眞綿を賜はりました。

戰地で働いてゐた軍人さんはどう思つたでせう。

「有り難いことだと思ひました」

有り難いことだ。勿體ないことだ。常にひたすら私達國民のことばかり御心にかけさせられ、又かうして私達軍人に、寒からう氣をつけて働けと有り難い御言葉。軍人は皆おし戴いて泣いたさうです。

又、怪我をした軍人には、御自身でお作りになつた繃帶を賜はり、御いたはりの御言葉を賜るなど御情深い御心を、國民は本當に有り難いこととむせび泣いたのであります。

昭和十二年支那事變が起つてからは、幾度となく、陸海軍の病院へ御出ましになり、怪我をした白衣の勇士をおなぐさめになりました。御見舞を頂いた勇士達は、餘りの有り難さに、も一度必ず直つてお國につくしますと、誓つたのであります。

お庭にできた綺麗な草花を賜はつて、おなぐさめになられたこともあります。

また戰地にある軍人に、御自身でおあみなされた襟卷を賜はりましたこともあり、足のない人や手のない人には、義足や義手を賜はりました。

大東亞戰爭になつてからも、有り難い皇后陛下のお惠みはしばしばで御座います。

又、皇后陛下は、大層、教育のこと、產業のことに、御心をお用ひ下さいます。屢々あちらこちらの學校に行啓あらせられ、教育についてお勵まし下さいます。

日本は昔から蠶は大事な產業なのですが、皇后陛下は、養蠶をお勵め下さいまして、御自身で宮中の御養蠶所に蠶を飼はれたり、博覽會や共進會に度々行啓あらせられて產業の發達をお奬め下さいます。

私達臣民は有り難い天皇陛下を戴き奉つてをります。私たち臣民は、またかやうに御德の高い皇后陛下を戴き奉つてゐます。臣民としてこの御恩に報い一身を捧げてお仕へしなければなりません。

昭和十八年十二月二十日　印刷
昭和十九年一月十八日　發行

修身教授（三學年用）

定價（特別行爲稅相當額）三、五〇／二〇　合計　參圓七拾錢

編纂者　中和會教育調査部　代表者　毛利昌

發行者　東京都麹町區麹町五ノ七　中和會事務所　代表者　內田義夫

印刷者　東京都本郷區元町二ノ九　隆文舍印刷所　代表者　江島文一　東東一五二一

承認番號　ア430939號
承認部數　10・000部

發行所　東京都麹町區麹町五丁目七番地　中和會事務所
電話　九段九五・五〇七八番
振替　東京六三二五四番
會員番號　一一七五一三

配給元　東京都神田區淡路町二ノ九　日本出版配給株式會社

2635
184